



日本・ラトビア国交樹立 90 年、国交回復 20 年記念植樹裏話 —門外不出(?)のラトビア・オークの輸入—

池田 裕子
(関西学院 学院史編集室)

10月20日と21日、ラトビア共和国のペーテリス・ヴァイヴァルス特命全権大使を関西学院にお迎えし、講演会と記念植樹苗木贈呈式が行われました。さらに、17日から28日にかけて、西宮上ヶ原、神戸三田の両キャンパスで「ラトビア歌と踊りの祭典」写真展も開催されました。一連の行事が終わった今振り返ってみると、予め定められていた道筋を辿ってきたに過ぎないように思えるのは何故でしょうか。

事の発端は4月初めでした。入学式から数日経ったある日、神学部に入学者の河田俊郎さんの来訪を受けました。吉岡記念館の掲示板で『関西学院史紀要』第17号にラトビアに関する論文が掲載されていることに気付かれ、執筆者である私に会いに来てくださったのでした。

「神戸市・リガ市姉妹都市提携35周年記念植樹式(シラカバ苗木贈呈式)が2009年に神戸市立森林植物園で行われた時、担当した技官です。牧師になるため、3月末で神戸市を退職しました。あの時のシラカバは順調に育っています。今年の夏を過ぎれば、神戸で2夏越したことになります」。思いも寄らぬ嬉しい訪問に、私の頭はシラカバでいっぱいになりました。

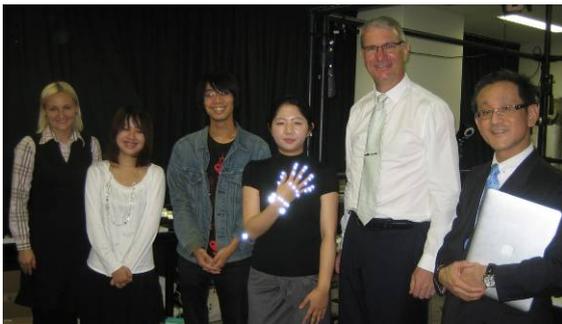
このことはラトビア大使館にもすぐにお知らせしました。シラカバの順調な生育は大使館にとっても喜ばしいニュースだったようです。「ひょっとすると、関西学院でもラトビアのシラカバが育つかもかもしれませんね?」。私の小さな問いかけにヴァイヴァルス大使はこうお答えになりました。「関西学院にはシラカバよりオークの方が相応しいでしょう」。「ラトビアのオーク? それこそオゾリンの分身に違いない!」。90年前に関西学院で教えていたラトビア人青年イアン・オゾリンの姓がラトビア語で「オーク」の意味であることを私は思い出しました。

しかし、植樹が盛んに行われているシラカバと異なり、オークはラトビアの国樹です。そんな大切な木を日本に持ち込むことができるのでしょうか。この話を神田健次室長にお伝えしたところ、植樹の可能性を探ってみようとおっしゃいました。

4月下旬、井上琢智学長と共に東京の大使館を訪問し、ヴァイヴァルス大使とオレグス・オルロフス次席にお会いしました。その時、前回の講演から3年経つので、再び関西学院でご講演くださるとのお申し出を受けました。また、「ラトビア歌と踊りの祭典」写真展のパネルをお貸しいただけることになりました。後日、オークの植樹もこの機会にぜひ実現させたいとのメールを頂戴しました。

井上学長は、秋に大使を関西学院にご招待したいので、講演会と写真展と記念植樹を行うための大義名分を考えるよう私におっしゃいました。言われるまでもなく、オゾリンの存在を常に身近に感じている私にとって、2011年は特別な年でした。オゾリンが関西学院を退職し、祖国ラトビアに帰ったのが今からちょうど90年前の1921年だったからです。そこで、「日本・ラトビア国交樹立90年、国交回復20年」を理由にこれらの行事を実施することになりました。

日程調整を経て大使をお迎えする日が決まりました。いよいよ苗木の入手方法を考えねばなりません。



理工学部のデモンストレーションではラトビア国歌の演奏も!

ダナさん、中村あゆみさん、合田竜志さん、櫻庭絵理子さん、ヴァイヴァルス大使、石藤誠教授

大使館におうかがいを立てると、リガ・ウッド・ジャパンのルートを使うよう勧められました。

リガ・ウッド・ジャパンとはラトビア最大の総合林産企業ラトビヤス・フィニエリス社の日本事務所です。代表の上野慶三さんは日本・ラトビア間を頻繁に往復されていて、ラトビアから来日する留学生、日本からラトビアに行く留学生で上野さんのお世話にならなかった人はほとんどいないと言われているほどです。神戸市に贈呈されたシラカバ



国際学部連続講演会での活発な質疑応答
ヴァイヴァルス大使とオレグスさん(通訳)

の苗木も、上野さんご自身がラトビアから日本に手荷物として持ち帰られたものでした。

上野さんとお近づきになってから、ラトビアのシラカバ合板の品質の高さや合板の歴史についてお話をうかがう機会が何度かありました。木材に無知で合板業界とも無縁の私に東京の新木場をご案内くださったこともあります。そうした中で、私が最も感銘を受けたのは1873年創業のフィニエリス社が、ロシア(ソ連)の占領下にあっても、ドイツの占領下にあっても、逞しく生き延びてきたという事実です。国がなくなっても会社は潰れなかったのです。それほどラトビアの合板技術は高かったということでしょう。「世界で最も早くに永続的森林経営を確立したラトビアでは、『シラカバはゴールド』と言って1606年から植樹されてきた。だから、シラカバの苗木はいつでも手に入る。しかし、オークの植樹というのは聞いたことがない。苗木も作られていないだろう。あったとしても、国樹を国外に持ち出せるかどうか…。」上野さんはこうおっしゃりながらも、「フィニエリスなら何とかしてくれるかも」と交渉を始めてくださいました。交渉に当たっては、オゾリンに関する論文を付け、ラトビアと関西学院の間にはかつて特別な絆があったことを強調してくださいました。

オゾリンの存在はラトビア国内関係者の心を動かしたようです。9月15日、農林大臣からオークの輸出許可が下りました。その知らせを私が上野さんから受けたのは17日朝のことでした。上野さんは早速、航空貨物の追跡調査を開始されました。と同時に、日本到着後の苗木の養生方法を考える必要に迫られました。これは、学長室、施設部とも相談の結果、神戸市立王子動物の元園長権藤眞禎さんを通して神戸市立森林植物園にお願いすることになりました。事情を説明すると、リガ市との動物交換に手腕を発揮された権藤さんは迅速に動いてくださいました。突然の無理なお願いに特別の配慮でお応えくださった森林植物園(青木孝知園長)と仲介の労をとってくださった権藤さんには心より感謝申し上げます。

9月21日、苗木が関西空港に到着しました。空港での植物検疫と通関手続きには5時間もかかったそうです。全て上野さんが対応してくださいました。ラトビアの苗は見たことがないと、植物防疫所職員が大勢見守る中、長旅を終えた苗木(オーク3本、シラカバ5本)は無事日本に入国しました。その中から、オーク2本、シラカバ3本が関西学院に寄贈されることになり、植樹場所は文学部北側(バラ園東)に決まりました。北国の植物を育てる上で、何より心配なのは夏の暑さです。少しでも涼しく、夏の西日が当たらず、人の目が届きやすいとの理由から、施設部の芝茂展さんが慎重に選んでくださいました。神学部で勉強中の河田さんも「いい場所ですね」とおっしゃいました。



10月20日午後3時15分、植樹予定場所で苗木贈呈式と記念プレートの除幕が行われました。その様子は、翌21日付の神戸新聞と産経新聞に写真入りで掲載されたから、お読みになった方もいらっしゃるでしょう。ラトビアから到着した苗は赤ちゃんのように小さなものでした。ビニールポットで1年以上養生を続け、十分に根を張らせてから記念プレートを囲むように植えられる予定です。

実は、上野さんは私にもシラカバの苗木を1本くださいました。「少なくとも冬の間は枯れる心配はないから、手元に置いて、ラトビアの苗が春に芽吹くところを自分の目で見て欲しい」とおっしゃいました。私に育てることができるでしょうか。大切な宝物(オゾリンの赤ちゃん?)をお預かりした気分です。



記念プレート除幕

井上学長、ヴァイヴァルス大使、上野さん



初日の予定を終え、井上学長のお点前で一服
ヴァイヴァルス大使、ダナさん、オレグスさん

